インカレ5連覇!!

女子ハンドボール

高松宮記念杯第53回全日本学生ハンドボール選手権大会

11月3日～7日
いしかわ総合スポーツセンター

木村有沙（体育４年）

対学生130連勝

絶対女王

宙に舞う楠本監督

男子ハンドボールの記事は2面に掲載しています。

優秀選手賞を受賞した北原佑美（体育４年）

OUHS
OSAKA UNIVERSITY OF HEALTH AND SPORT SCIENCES
スポーツ大体大
第29号
発行所
大阪体育大学企画広報室
編集長　相馬卓司
編集助手　中村優志
発行責任者　石川朋広
大阪府泉南郡熊取町朝代台1-1
電話（072）479－3111
FAX（072）453－8972
協力＝教育後援会・学友会

NAMISHO GAKUEN
100th Anniversary

全日本インカレ4連覇中の大体大が大教大を23－16で降し、日体大、東女体大に次ぐ史上3校目の5連覇を果たした。しかし中身が違う。対学生5年間無敗の130連勝で5連覇を成し遂げたのだ。50年連続50回目出場の節目の大会で、学生女子ハンド界の記録を次々塗り替えた。「絶対女王」の誕生だ。

取り戻した自分たちのハンド

名将楠本繁生監督が宙を舞った。「1回、2回、3回、4回、5回」―。コート、ベンチ、スタンドが一体となった。大体大は1戦1戦試合内容が良くなっていった。初戦は金沢星稜大を50－5で一蹴。勢いに乗るかと思われた2回戦の中京大では20－16と苦戦を強いられた。馬場敦子主将（体育4年）は「中京大戦が全然ダメで、チーム全体で話し合って、自分達の最初の気持ち、ここに臨む気持ちの甘さが出たと感じた」と中京大戦を振り返った。

不安を残し、悪い流れで3回戦に進んだ大体大だが、周りの不安をあっさり一掃した。関東の強豪、早稲田大に20－12で庄勝し、準決勝へ。まるで違うチームのような変わりようだった。驚きの変化の裏には、シンプルな答えがあった。「中京大戦の後、みんなで話し合ったことで気持ちの面でチームが一変した。気持ちが変わったことで、しっかり自分たちのハンドが出来るようになった」と馬場は、自分たちで行った、たった一つのミーティングがきっかけだと言う。

ミーティングで意識を変えただけで、驚くような変化は起こるものなのか。続く準決勝の東女体大戦で更に驚かされることとなった。昨年の準優勝チームを30－15のダブルスコアで降し、決勝進出を決めたのだ。

特別賞を受賞した
中山佳穂（体育１年）

徹底した選手同士の話し合い

ここまでの戦いで、大体大ハンドボール部女子の強さは、選手同士での「徹底」した話し合いから生まれている。楠本監督から指導される以外でも、選手同士で理想のハンドボールを目指すために、絶えず話し合いが行われている。時には夏休みの午前と午後の練習の合間に、学内の食堂で集まって話し合っている姿が見受けられた。

常日頃から日本一に向けて、すり合わせてきた意識があるからこそ、インカレの舞台でのピンチもチャンスに変えられたのだろう。

4名が優秀選手賞を受賞した。左から馬場敦子、近藤万春、北原佑美、谷華花（いずれも体育４年）

プレッシャーを乗り越え

「周りからは5連覇と言われ続けながらこの1年走ってきたけれど、正直不安の方が大きかった」と胸の内を明かした楠本監督。不安だったのは選手も同じだった。決勝終了後、4年生のほとんどから「本当にしんどかった」と本音が漏れた。監督、選手とも計り知れないプレッシャーがあったのだ。

今年は主力で試合に出続けていた4年生の馬場、谷華花（体育）、近藤万春（同）、北原佑美（同）のカルテットが残っていたが、苦しいシーズンを送っていた。春の関西、西日本と1点を争う試合が多く、「今年は絶対的エースの不在と軸の二つがなかった」と楠本監督が苦しんだ理由を明かした。

苦しみながらも勝ち進んだのは、チーム一丸となって戦ってきたからだ。楠本監督は「今年は、チーム力を上げるためにメンバー全員で戦う」というスタイルを春から貫いてきた。今回も20人の登録はしたものの、誰がスタートで出るかというのは試合当日、その時の体調などすべて含めた状況で決めていた。楠本監督は「準決勝、決勝の試合では出場した選手が期待に応えてくれ、チーム力も高まった1年の集大成で、全員ハンドが出来た」と学生大会最後の大舞台で、最高のパフォーマンスをみせた選手をたたえた。

関西スポーツ賞優勝祝賀会

偉業の後には嬉しいニュースが待っていた。1月10日、関西運動記者クラブ（新聞、通信、放送175社、700人加盟）が選ぶ関西スポーツ賞団体の部を受賞、同15日に大阪市内のホテルモントレ大阪で表彰式があり、13日にはウェスティンホテルで華やかに優勝祝賀会が開かれた。

（詳報はOUHSジャーナル215号に掲載）

日本選手権2連覇女王と1点差の死闘

第69回ハンドボール選手権大会・女子

12月20日～24日／八尾市立総合体育館他

両チーム最多の８得点の活躍・中山佳穂（体育１年）

昨年日本選手権ベスト4に入る快挙を成し遂げたハンドボール部女子。今年も学生日本一のチームとして2回戦から出場した。大体大は初戦からJHLのHC名古屋と対戦した。トップリーグのチームを相手に25－16の快勝で初戦を突破した大体大は、2年連続のベスト4をかけて、昨年度優勝のオムロンと対戦した。試合は序盤から終始、大体大ペースで進む。北原佑美（体育4年）の連続ゴールで大体大が先制すると前半は14－11でリードした状態で折り返した。後半はオムロンの攻撃をGKで主将の馬場敦子（体育4年）がスーパーセーブ連発で得点を許さず、両者なかなかゴールの奪えない展開。1点を争う試合でトップリーグのプライドを背にジリジリと追い上げてくるオムロン。後半10分以降はお互い同点にされてはリードするシーソーゲームが展開された。試合時間残り1分30秒にオムロンの7人攻撃で大体大は痛い失点をしてしまう。相手のミスからラストチャンスが転がり込むが、決めきることができず、23－22の死闘の末、ベスト8で大会に幕を下ろした。

勝敗を分けた気持ちの差

楠本繁生監督、馬場敦子主将の両者は口を揃えて「勝ちたいという気持ちの差が勝敗を分けた」と日本選手権2連覇を決めた王者との試合を振り返った。試合内容は大体大がリードする時間の方が長く、オムロンを追い詰めていた。両者の言う「気持ちの差」は緊迫した試合の大事な局面で影響を与えた。絶対に負けられない、というプライドで挑むオムロンの意地の猛攻に、大体大は慌ててしまい守りきれなかった。

実業団は普段から年間通したリーグ戦で日本トップレベルの試合を戦っている。馬場は「普段から僅差の試合をやってきていると思うので、そこの差がでた」と言うように学生相手に戦い負けなしの日々を過ごす大体大と、実業団チームの経験の差は否めなかった。加えて4年生でチームの要の谷華花（体育）が試合直前の練習で負傷。楠本監督は厳しい状況でも「けがは仕方ないけど、格上の相手にチームがベストな状態で臨めていないということ自体がスタートラインにきちんと立てていない。準備がきちんとできていないのがチームの弱さだと思う」と準備不足であると指摘した。

実業団にも怯まぬ精神で

「学生にも実業団に怯まずやって欲しい、という思いで指導している」と話したのは楠本監督だ。楠本監督は選手を勝利に導くことは勿論だが、日本女子ハンドボールの発展を考えて選手を指導している。楠本監督の想いは学生に伝わっている。馬場の口から何度も「悔しい」と出たのは、実業団相手でも勝利を本気で目指している証拠だろう。届きはしなかった勝利だが、次なるステージへ上がる4年生の成長へ大事な一戦になったに違いない。馬場は最後に「本当に情けない4年生で、情けないようなキャプテンだったけど、後輩たちが頑張ってくれたから今のチームがあった。後輩たちには感謝しています。更に、自分たちをこういう舞台に立たせてくれた楠本先生にも感謝しています」と感謝の意を表し、学生ハンド最後の試合を締めくくった。

高松宮記念杯第60回全日本学生ハンドボール選手権大会

男子はベスト8

昨年のインカレはベスト8で涙を呑んだ大体大は、またしても厚い壁に阻まれた。1回戦を14点差の圧勝で突破した大体大は、2回戦では強豪・立教大との激戦を制し、準々決勝へと駒を進めた。

11月3日～7日／いしかわ総合スポーツセンター

女子が苦戦しながらも先に準々決勝を突破し、男子の闘争心に火をつけた。試合序盤、女子から受けた流れに乗り、昨年3位の日大相手にリードする。一進一退の攻防を続けていたが、前半の半分を過ぎたところから日大に流れをつかまれ、11―19の8点ビハインドで前半を折り返した。

後半に望みをかけ、全力でプレーしたが、前半の点差が響き、28―36でまたもやベスト8で幕を下ろした。

試合後、後藤悟主将（体育4年）は「悔しい」と唇をかみしめた。悔しさの原因は負け方にあった。試合序盤のような大体大らしい試合運び、自分たちの持っている力を出し切れず、敗れたからだ。さらに後藤は「この舞台で力を出しきれないというのが、自分たちの力のなさ」と言葉を絞り出した。

リベンジの機会へ

学生だけの最後の大会は終わったが、日本選手権（12月19～24日、大阪市中央体育館他）という最大の大会が残っている。後藤と下川真良監督は「日本選手権でインカレのリベンジをします」と最後の大会に向けて気持ちを切り替えていた。

男子ハンドボール

第69回日本ハンドボール選手権大会

12月19日～20日／田辺中央体育館他

インカレ2連覇王者と死闘も惜敗

全カテゴリーでのハンドボール日本一を決める大会に、近畿ブロック代表としてハンドボール部男子が出場した。初戦は関東ブロック代表の社会人クラブチームのFOG相手に前半から大差をつけ、27―20で快勝。続く2回戦は、今年インカレ2連覇を成し遂げた国士舘大と対戦した。大体大は前半から互角の戦いを繰り広げ、9―13と僅差で前半を終える。後半開始早々、3連続得点で1点差に追り、国士舘大を追い詰めた。後半17分にはビッグプレーで会場を沸かせる。主将の後藤悟（体育4年）から岡本隆太郎（同）のスカイプレーで反撃に火を付けたかったが、「国士舘はずっと同じチームでやってきていて、インカレ王者らしく余裕があった」と下川監督が言うように、試合時間残り10分からじわじわ点差をつけられ、惜しくも22―29で大金星とはならなかった。

身長差約10センチもある日本代表選手相手に力強いプレーを見せた香川壮次郎（体育4年）

主将・後藤悟（体育4年）は両チーム最多、大量8得点

個の国士舘大VS総の大体大

国士舘大は日本代表の玉川裕康、U―22日本代表の安倍竜之介、齋藤大生を始め、学生ハンドの中で個の能力がズバ抜けている。更にスタメンの平均身長も大体大より約10センチも高い。下馬評でいけば国士舘大の圧倒的有利だっただろう。

大体大は個の差をチームで補った。下川監督も「チームとして今日はよく頑張った。4年生は意地も見せてくれた」とチームのまとまりをたたえた。もう少しのところで手にできなかった勝利。後一歩を掴み取るのが難しい。下川監督は「勝つためには、監督が自分に代替わりするけど、偉大なOBの方々をはじめ、応援されるチームになること」と技術よりも大切な力が必要と述べ、ミーティングの際にも学生に強く話していた。

恵まれた環境に感謝

この1年間どんな試合でも、主将の後藤は活躍し続けた。国士舘大戦でも両チームトップの8得点をたたき出した。一見、昔からのスタープレイヤーだと思われがちだが、強豪高校出身でもなく世代別の選抜にも選ばれていない選手だった。

後藤をここまで育てたのは、大体大ハンドボール部男子そのものだ。後藤は「大体大でなかったら、自分はここまでできていなかったと思う。大体大を選んでよかったという思いは誰よりも強いです」と4年間を振り返るほど、濃い学生ハンドボール生活を送ってきた。後藤の成長は環境だけではなく、後藤自身の考え方にもある。後藤は「宍倉先生には感謝の気持ちしかない。関わってくださった全ての人に恵まれた」と今年がラストイヤーの宍倉保雄総監督をはじめ、関係者への感謝の意を表した。後藤の感謝を忘れない姿勢が、ハンドボール選手としても成長させた違いない。後藤はJHLのチームへの入団が決まっている。トップリーグでも持ち前の謙虚さで、日本のハンドボールを牽引する選手になって欲しい。

多数悲願の1部復帰！男子高島種目別平行棒優勝！

体操競技

第71回全日本学生体操競技選手権大会

8月8日～10日　富山市総合体育館

学生体操競技の集大成の全日本インカレ。大体大は男女とも2部に所属する。全国の大学で男子12校、女子10校しか入れない1部復帰を目指して大会に臨んだ。女子は2部で団体準優勝し、1部の下位から2番目のチームの総合得点を上回り、1部に返り咲いた。個人総合でも小林千鶴（体育2年）が3位に入る活躍を見せた。男子は団体総合で6位入賞を果たし、個人種目別では高島康平（同2年）が平行棒で優勝する活躍を見せた。

乗り越えたアクシデント

女子団体は序盤から圧巻の演技だった。得点でも優勝校とほとんど変わらず、3種目目の跳馬まで来ていた。跳馬の後は、大体大が苦手とする段違い平行棒を残していた。関西個人総合準優勝のエース竹谷清花（体育2年）は跳馬で高得点を狙い、難易度の高い技にチャレンジしたが、着地の時にアクシデントが起きた。膝を痛めてしまい、演技続行は不可能となった。

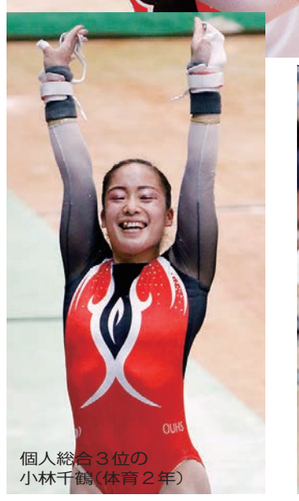
段違い平行棒でも高得点が期待されていた竹谷の離脱は、女子団体を厳しい状況へと追い込んだ。女子団体を応援するスタンドの体操競技部が不安がる中、残るメンバーは粘りの演技を見せた。唯一の4年生、廣田楓（体育）は「アクシデントはあったけど、試合では自分たちを信じて一人一人が練習でやってきたことを出せたと思う」とアクシデントを乗り越え、練習の成果を感じていた。

4人で戦い抜いたラストイヤー

6位入賞に終わった男子団体を率いたのは4年生で主将の大塚雄也（体育）と押田篤志（同）だ。特別メンバー候補で入部した2人ではないが、藤原敏行監督のもと、必死に練習し2年生の時からメンバー入りした努力の選手だ。押田は「この大会は体操競技を16年やってきて、1番体操に向き合った1年間」と語るように、ミスが出ても常に前を向いて戦い抜いた。出場した選手だけではない。他にも学連でチームを支えた4年生と主務としてチームを支えた4年生の合計4人、誰一人欠けてもならない状態でよくここまで頑張った」と藤原監督は4年生全員の働き、活躍をたたえた。

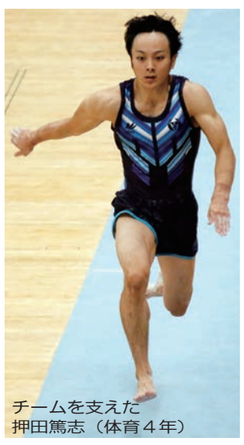
「来年は今年よりも強くなることは見えている」と力強く言い放ったのは男子主将の大塚だ。今大会最も活躍したのは男子種目別平行棒で優勝の高島や、女子個人総合3位の小林ら2年生だ。更に男女ともに1年生が団体メンバーに選ばれている。1年生で大舞台を経験し、2年生で結果を残した選手は来年チームを引っ張る存在になるだろう。

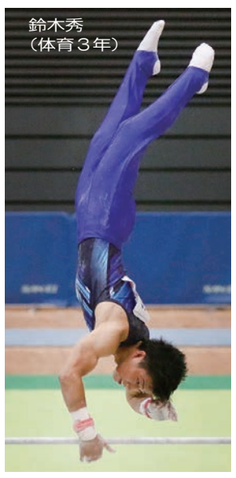
種目別平行棒で優勝の高島康平（体育2年）


個人総合3位の小林千鶴（体育2年）

団体メンバー最年長廣田楓（体育4年）

主将の大塚雄也（体育4年）


チームを支えた押田篤志（体育4年）


鈴木秀（体育3年）

陸上競技

女子砲丸投げ奮闘！

第86回日本学生陸上競技対校選手権大会

9月8日～10日／福井運動公園陸上競技場

来年は3人で表彰台

真夏を思わせる暑さの中、学生日本一をかけた陸上競技の大会が3日間行われた。今大会最も世間を賑わせたのは、最終日の男子百㍍で日本人初の9秒台が出たことだろう。数々の種目で大会記録や学生記録などが更新されるハイレベルな大会に、大体大から34人もの選手が出場し、4種目6人の選手が入賞する好成績を収めた。男子やり投げ、男子ハンマー投げ、女子ハンマー投げ、女子砲丸投げと大体大投擲陣が好成績を残した。

別格の活躍を見せたのは、女子砲丸投げだ。出場枠はフルの3人が出場し、3人とも入賞を果たした。最上位の4位入賞を果たした山本遥（体育3年）は今回の快挙について「インカレという大きな大会の最後に、めったにない女子砲丸投げで3人が入賞できてうれしい。森友紀（体育3年）は70㍍近くもベスト更新したので、本当に良かった」とみんなで入賞できたこと、仲間の記録が伸びたことに対するうれしさを語った。

快挙を成し遂げた女子砲丸投げだが、山本、田村満孔（同2年）は納得いかない様子だった。4位入賞はしたものの記録がベストよりも下回っていたからだ。山本は「シーズンベストが出たのは良かったが、ベストから20㌢も下回っている。今年は無理かもしれないが、来年は一気に16㍍台に乗せたい」と更なる飛躍を誓った。今回入賞した3人はまだ2、3年生だ。来年もインカレに出られるチャンスがある。練習により一層の磨きをかけ、来年は3人揃っての表彰台ということも期待できる。

4位入賞の山本遥（体育3年）

8位入賞の森友紀（体育3年）

7位入賞の田村満孔（体育2年）

下級生成長!!

水泳競技

全レースベスト更新の活躍丸山康之（体育2年）

B決勝進出の佐藤董（体育2年）

第93回日本学生選手権水泳競技大会

9月1日～3日　東和薬品ラクタブドーム

真夏の終わりを象徴する水泳のインカレ。大体大は初日に今シーズン日本選手権など日本トップレベルの大会に出場した期待の佐藤董（体育2年）がB決勝に残るなどの活躍を見せた。中でも最も輝きを放ったのは、2日目の出場レースすべてでベストタイムを記録した丸山康之（同）だ。学生の全国大会だが、五輪選手なども出場するハイレベルな大会でも物怖じせず、自分の最高のパフォーマンスを発揮した。メドレーリレーではアンカーを務めた。

尾関一将監督は「リレーは全体的に結果が出なかったのは残念。まだまだということ。丸山はベストを更新したので、本当に良かった」と丸山の活躍をたたえた。

水上競技部はジャパンオープン、インカレと出場選手は3年生以下が多い。今回活躍した2年生以外にもジャパンオープンに出場し、関西インカレで入賞や、メダルを獲得した大西迪瑠（同3年）や、滝澤有哉（同2年）など、伸びしろの大きい実力者が、まだまだ成長途中にある。前回のインタビューでも藤原寛人主将（同4年）は「後輩たちは着実に力を付けてきているし、水泳に対する探究心がある」と評価していた。今シーズン見られた成長は、来シーズンでさらにレベルアップしているはずだ。

女子バスケットボール

村上監督初年度で躍進！インカレ8強

第69回全日本大学バスケットボール選手権大会

11月28日～12月3日 宮城・カメイアリーナ他

大学最後の大会である全日本インカレは仙台市で行われた。大体大は、昨年2回戦敗退、一昨年は初戦敗退、と悔しい思いをしていた。順当に勝ち上がれば昨年惜敗した東京医療大とベスト4をかけて対戦することが予想されていた。両校順当に勝ち上がり、迎えた準々決勝。大体大はまたしても東京医療大に苦杯を味わされた。

それでもベスト8で敗退したチームで行われる5～8位決定戦へ進み、全国の舞台で5試合を戦い、昨年、一昨年を大きく上回る8強を占めた。

大体大はベスト8と躍進したが、インカレ前のチームは苦しい状況だった。1年生の時から試合に出続け、チームの得点源でもあり、主将としてチームを引っ張って来た鐘ヶ江さゆり（体育4年）がけがで、戦線離脱を余儀なくされた。村上なおみ監督は「選手には言ってないけど、正直（鐘ヶ江の離脱は）大きかった」と本音を漏らすほど、チームは厳しい状況でインカレを迎えた。

日本一のチーム力で乗り越えた苦難

厳しい状況の中、監督を始め、選手達はあきらめかかった。しかしそうはいかない。「主将がいない状況が、一人一人に自覚を芽生えさせ、団結力・チーム力が上がった」と村上監督は話す。選手の気持ちは試合に見事に出ていた。大体大は西日本、秋の関西リーグと自分達の甘さで、粘り切れない試合や、試合のスタートダッシュに失敗する試合などを繰り返した。だがインカレでは違った。1回戦はスタートダッシュを決め、一度も相手にリードを許すことなく勝利。続く2回戦は試合序盤、相手にリードを許したが、常に射程圏内の点差を保ち、後半に一気に逆転、勝利を収めている。

3回戦は敗れたが、ディフェンスから攻め続け、優勝した東京医療大を苦しめるバスケットを展開した。試合に出ていた4年生全員が「8位という結果は悔しいけど、悔いはない」とインカレを笑顔で振り返った。エースとしてチームを支えた上長美菜（体育4年）は「結果は日本一ではないけど、応援、チーム力は日本一のチーム」と学生最後の大会で最高のチームになれたと感じていた。

重圧の一年目で躍進と来季への期待

ベスト8と躍進した大体大だが、今年の目標は日本一だった。試合後、村上監督は伝統ある常勝チームを、監督として初めて率いた1年間に涙を隠し切れなかった。1年目で春の全関西優勝後、結果が出ないままでいた。周りから期待され、アクシデントもあり、試行錯誤しながら迎えるインカレに不安は大きかっただろう。1年目のインカレで目標の日本一になれなかったが、昨年の結果を上回る8位は、来季へつながるだろう。

村上監督は「勝負の世界だから勝たないといけないし、1点でも多ければ勝ちという世界でやっていることが改めて分かった。インカレの舞台で全国の相手と5戦を戦い抜くために足りないもの、戦えた部分がはっきりと分かったので、もっと研ぎ澄ました練習をしないといけない」とインカレの厳しさを実感し、来季に向けて走り始めていた。

1年生で唯一試合に出場した中村有希（体育1年）

インカレでも高い得点力を発揮した上長美菜（下も）

全試合スタメン出場の大石萌夏（体育3年）

関西準V

関西女子学生バスケットボールリーグ

9月22日～10月22日 大阪・東和薬品ラクタブドーム

敢闘賞受賞の主将鐘ヶ江さゆり（体育4年）

優秀選手賞受賞の上長美奈（体育4年）

関西No.1の座をかけたリーグ最終節は宿命のライバル、大体大vs人科大のカードになった。春の全関西、1次リーグでは大体大が制したが、リベンジに燃える人科大の挑戦者としての勢いが勝った。序盤に波に乗られた大体大はゲームをひっくり返すことはできず、66―87で、準優勝でリーグ戦を終えた。

個人賞では鐘ヶ江さゆり（体育4年）が敢闘賞、上長美菜（同）が優秀選手賞、水上千聖（同）が3ポイント王を受賞した。

大体大らしさが見られなかった。村上なおみ監督は「追いかけるときは相手に向かっていく気持ちが強くて、良いゲームになるけど、全勝優勝まであと一つのところで受け身になって、自分たちのプレーが出来なかった。向こうのほうがこのゲームに集中するという気持ちが強かった」と敗因は気持ちの面が大きいと振り返った。

この敗戦はインカレ前に貴重な経験を得た敗戦となっただろう。もう一度チャレンジャー精神を取り戻すことができたのだ。選手全員から悔しさをかみ締め、次に向かう表情が見られた。

スリーポイント王受賞の水上千聖（体育4年）

男子バスケットボール

インカレV3の筑波大に善戦

第69回全日本大学バスケットボール選手権大会

11月20日～11月26日／東京港区スポーツセンター

大学バスケットのシーズンを締めくくる、全日本インカレは都内の4つの体育館で行われた。大体大は初戦で、同大会3連覇中の筑波大と対戦、筑波大を苦しめるシーンは何度もあったが、フィジカルと高さ、経験の差を埋めることができず、初戦で姿を消した。

11年ぶりの全日本インカレ出場の大体大は、選手全員がこの舞台に立つのは初めてだが、ここで勝つために練習してきた。成果は試合内容に出ていた。

準優勝筑波大を相手に32得点の活躍内藤健太（体育4年）

エース内藤大量得点

プロ入りが決まっているエース内藤健太（体育4年）は日本代表候補にも入った筑波大の杉浦とマッチアップし、1人で32得点をたたき出した。エースの活躍以外にも大体大のディフェンスから走るバスケットで第2Q、第3Qと筑波大を抑え込み、全国でも大体大バスケットが通用することを証明した。比嘉靖監督は「高さ、フィジカルなど足りない部分はあるけど、試合の手応えはあった。下級生も含めて応援に来ているみんなも、インカレの雰囲気を感じられたのが良かった」と、経験という収穫があったと振り返った。

1年生ながら準優勝筑波大を相手にPGとしてゲームメイクした藤本巧太（体育1年）

大体大バスケットボール部男子は着実に力を付けてきている。足りないのは全国大会などの経験だけだ。比嘉監督は「インカレに来ただけで満足ではなく、1勝、2勝、ベスト8、ベスト4といけるようにステップアップしていきたい。そのためには、インカレの場に慣れることや、関西で優勝して毎年来られるようにしないといけない」と経験値を上げるという課題を提起した。内藤も「最後の勝負所では経験の差が出た。自分も後輩も全国の舞台は初めてなので、ここから経験を積んでいけば今年よりも良い成績を出せるチームだと思う」と監督同様課題は経験であることを上げ、後輩達へ期待を寄せた。

筑波大の高さに負けじと大体大のゴール下を守り筑波大のゴール下を攻めた伴駿毅（体育3年）

大応援団は大体大の「最強の武器」

関西学生バスケットボールチャレンジマッチ

11年ぶりインカレ出場決定

10月31日／大阪市立東淀川体育館

教育実習で不在の主将岸田篤生（体育4年）の背番号20を表した集合写真

会場に歓喜の渦が巻き起こった―。関西学生連盟に与えられたインカレ出場、最後の1枠をかけた試合は、大体大が11年ぶりに悲願を達成。

対戦相手の関大は2部のチームだが、今季、1部上位チーム相手に練習試合とはいえ、数々の勝ち星をあげる実力を誇っていた。

大体大も練習試合2戦とも負けており、相性が良くない相手だ。大体大は対戦成績では上手の強敵関大に、大接戦の末78‐75で競り勝った。

試合はリーグ戦全勝優勝の関大が、リーグ戦の勢いそのままにも猛攻を仕掛ける。大体大もエース内藤健太（体育4年）を中心に攻めるが、序盤は1点差を追う展開となった。どちらも譲らぬ、一進一退の攻防を繰り広げ、1点を争う壮絶なシーソーゲームになった。拮抗した試合の流れは、第3Q、4分を経過した時に崩れ始めた。大体大の速い試合運びが、関大のチームファウル、主力選手のファウルを呼び込んだ。大体大は攻めのディフェンスが出来なくなった関大に更なる猛攻を仕掛け、一気に逆転を狙う。

大体大最大のチャンスに〝バスケットの神〟は試練を与えた。エース内藤が負傷した。内藤は出血が止まり、応急処置が終わるまでコートから退くことを強いられた。4年生がいないコートに不安が漂う。エースがいない。嫌な流れになりそうなコートを見ると、不安は払拭された。コートに立つ選手たちは、「内藤は絶対にコート帰ってくる」と信じて疑わなかった。「帰ってくるまでやられない」という覚悟が見られ、気持ちがプレーに乗り移る。

第4Q、伴駿毅（同3年）が魂のバスケットカウントでチームを鼓舞した。伴を含む全ての選手が吠えた。流れを奪った大体大は逆転に成功、試合時間残り5分、関大にとどめを刺すため、エースがコートに帰ってきた。エースの復活に会場はどよめいた。復活のエースを中心に猛攻を仕掛け続けた大体大は、試練を乗り越え悲願のインカレ出場を果たした。

チーム最多22得点山田友哉（体育2年）

全員でつかんだインカレ

集合写真の部員は右手に2、左手に0というポーズをとった。20という数字は、内藤と共に1年生の時からレギュラーで試合に出ていたが、今春、負傷して戦線離脱を余儀なくされた岸田篤生主将（同4年）の背番号だ。内藤は「1年の時から一緒に試合に出続けていて、試合に出ることが出来ない辛さは、僕が一番わかると思う。それに岸田は教育実習中で、会場にも来られない。負けた時点で引退。それだけは絶対にダメだなと思ってプレーした」と苦楽を共にした仲間のためにも勝てたことを喜んだ。

選手、スタッフ、応援団、全員が一つにまとまった集大成がチャレンジマッチだった。監督に就任して、初のインカレ出場を勝ち取った比嘉靖監督は「本当に一つのチームにまとまっていると感じた。大体大の武器である応援団、コートに立つ選手、全員で勝ち取った勝利」と激戦を振り返った。試練を乗り越えた比嘉監督は「本当はリーグ戦で優勝してインカレに行ければ良かっただろうけど、チャレンジマッチでは普段のリーグ戦より、たくさんのお客さん、OBも見に来ることが出来、そこで今年のバスケットボール部男子の良い場面を見せることが出来たのは本当に良かったと思う」と最後の最後に今年一番の試合を見せることが出来たことに納得の笑み浮かべていた。

エースの内藤健太（体育4年）

女子サッカー

インカレ3位入賞！

第26回全日本大学女子サッカー選手権大会

12月25日～1月14日／味の素フィールド西が丘

インカレの準決勝は1月12日にあり、大体大は神奈川大と対戦した。大体大は延長戦の末1―2で敗れたが、東洋大との3位決定戦に挑み、1―0の接戦をものにして全国3位の座に輝いた。

シーズンラストマッチを勝利で飾る！

下馬評を覆したインカレ

3年ぶりに西が丘のフィールドに帰ってきた大体大は、女子サッカー関係者の下馬評を大きく覆す活躍を見せた。大体大の快進撃の始まりは年末、12月28日に、みきぼうパークひょうご第1球技場で行われた日体大とのインカレ準々決勝から始まった。関東女王で、優勝候補No.1である日体大に大接戦の末、1―0で勝利を勝ち取り、歓喜の渦を巻き起こした。1月12日、西が丘で行われた神奈川大との準決勝では、勝利こそ逃したものの、試合後半ロスタイムに同点弾を浴びるまでリードしており、勝利目前まで迫る試合を演じた。

攻守にわたって活躍した鈴木千尋（体育2年）

監督の起用に応えた本田

東洋大との3位決定戦に進んでも大体大の勢いは止まらない。スポーツ紙、サッカー情報誌のカメラマンのほとんどが東洋大側を撮影する中、大体大は前半からゴールポスト直撃のシュートを2本放つなど、東洋大ゴールを脅かす。両者得点が動かないまま後半戦に突入すると得点を奪いにいくため、大体大ベンチが動いた。

FW井之脇朱音（体育2年）に代えて、FW本田鮎美（同3年）を投入。交代1分後、本田が石居亨子監督の起用に結果で応えた。81分、今田怜那（同2年）が左足で放ったシュートのこぼれ球に本田が反応し、ゴールマウスに押し込み大体大が先制した。大体大は本田が決めた1点を守り切りシーズン最後の試合でもある3位決定戦をものにして、インカレの幕を下ろした。

本田のゴールを祝福

次なるステージへ

3位に輝いた大体大だが、選手、監督ともに満足はしていない。目標である日本一にはばならない。ゲームキャプテンであり、ディフェンスからチームを引っ張った吉田と主将の田中楓子（同3年）が「悔しい」とインカレを振り返ったように、決して結果に満足していなかった。石居監督も「最低限の結果」と振り返った。

頂点までたどり着くには足りなかったものが二つある。サッカーの技術面では石居監督が「次のステージに行くには、もう少しきちんとサッカーを勉強して、（試合展開を）楽にと言うか、相手が嫌がるところを突けたりするところまでいかないと、個のところで負ける」と課題を話した。チームの全体的なところでは田中将の田中楓子（同3年）が「悔しい」とインカレを振り返ったように、決して結果に満足していなかった。石居監督も「最低限の結果」と振り返った。

頂点までたどり着くには足りなかったものが二つある。サッカーの技術面では石居監督が「次のステージに行くには、もう少しきちんとサッカーを勉強して、（試合展開を）楽にと言うか、相手が嫌がるところを突けたりするところまでいかないと、個のところで負ける」と課題を話した。チームの全体的なところでは田中将の田中楓子（同3年）が「悔しい」とインカレを振り返ったように、決して結果に満足していなかった。石居監督も「最低限の結果」と振り返った。

ゲームキャプテンでチーム引っ張ったDFリーダー吉田紫穂（体育4年）

重ねが足りないことを痛感していた。

課題はあるがインカレでは成長もあった。田中が「大会で成長できたことが結果に大きくつながった」と言うように、チームは試合をするたびに強くなっていた。手応えと課題の両方を手に入れた大体大。最後に田中が「残りの1年間悔しい気持ちを持ち続けて、次は結果と成長することで今回以上の物を得られるようにしたい」と主将として来季への意気込みをみせた。

同期の友情

試合後、吉田紫穂（体育4年）と藤井菜穂（同）の同期が、涙ながらに熱い抱擁で勝利を噛み締めていた。藤井は試合に出られない悔しさを抑え、ベンチから誰よりもピッチ上の選手に指示の声を出し、チームを鼓舞した。その姿には4年生として最後のインカレに懸ける思いの強さが現れていた。

藤井の気持ちを誰よりも感じていた吉田は「藤井の分もピッチに立てる分、プレーで示そうと強く思っていた」と藤井をはじめ仲間全員の想いを背負いピッチを駆け回った。大体大の勝利には同期の友情が大きな影響を与えていた。

3年連続関西秋季リーグ優勝

平成29年度関西学生女子サッカー秋季リーグ

9月2日～11月12日／大体大サッカーG他

準決勝では長町優里（体育4年）が会場を驚かすスーパーゴールを決めた

全国で勝つためのチーム作り

春のリベンジ果たした！

春はチーム作りの初期段階ながら準優勝に輝いたサッカー部女子。春、秋と毎年優勝争いをする姫路獨協大に勝利することは出来なかったが、リーグ戦負けなしで3年連続秋の関西女王に輝いた。

サッカー部女子はインカレで勝つために春から徐々にチーム力とサッカーの完成度を高めていく。春は姫路獨協大に優勝を与えたが、春季リーグ全日程終了後に主将の田中楓子（体育3年）は「負けていい訳ではないが、春は勝つための（レベルアップの）期間なので結果より内容です」と明かした。

完成度を高めて来ている秋の大体大は無類の強さを見せた。負けなしでのリーグ優勝は完成度が高まっている証だろう。主将の田中も、「秋は毎年優勝する。チームもドンドン良くなって来ている」と秋リーグを終えてチームの完成度に手応えを感じている。サッカー部女子は、現在の4年生が1年生の時に西が丘（インカレ準決勝以進出）を経験して以来、立てていない。西が丘を唯一知る4年生が完成度を高めたサッカーで、後輩たちとともに西が丘の舞台に立った。

悔し涙のベスト16

第66回全日本大学サッカー選手権

12月13日～24日
上柚木公園陸上競技場

夏の総理大臣杯、冬のインカレと、大学サッカーは1年に2回日本一を決める大会がある。大体大は、夏はベスト8で筑波大に惜敗、悔しい思いをしている。インカレでは全国優勝へリベンジに燃えていたが、初戦の福岡大に1―2で敗れ、ベスト16で涙を呑んだ。

尾元太監督が「塁（末吉）が入って流れが変わった」と言うように、けがをものともせず、果敢に攻め好機を演出した。末吉を起点に攻める大体大は、後半32分、田中駿汰（同2年）がシュートを決め、ようやく1点を返した。同点へ猛攻を仕掛ける大体大は、試合終了間際、ペナルティーエリア1ゴル手前でFKのビッグチャンスをつかんだ。浅野雄也がゴールマウスギリギリの左下にシュートを放ったが、プロ内定の福岡大GKのスーパーセーブに阻まれ、惜しくも追いつくことが出来ないままホイッスルを聞いた。

作戦を練る選手たち

追いかける得点を叩きこんだシュートの瞬間の田中駿太（体育2年）

監督1年目の苦悩

松尾監督新体制初年度で関西トーナメント3位、関西リーグ準優勝、インカレベスト16の結果は決して悪くはない。初のインカレで苦い思いをした松尾監督の試合後の第一声は「選手たちはよく頑張ってくれた。4年生も少ないながらに頑張った。1日でも長くプレーさせてあげたかった」。落ち込む選手たちを労うものだった。監督として初めて臨んだインカレについては「インカレのようなトーナメントは理想的な流れに持っていくのが難しい。相手の強みが前面に出た試合になってしまった」と悔しそうな表情で振り返った。

スタートラインに立ったばかりの松尾監督の苦悩、プレッシャーは大きかっただろう。思いが込み上げてきたのかグッと感情を抑えながら「今年監督初年度で選手をはじめ、いろいろ迷惑や負担をかけてしまったところはあると思う。その中で選手たちは本当に頑張ってくれた」と共に切磋琢磨してきた選手の努力を再びたたえた。

４年生唯一の出場選手 太田賢吾（体育４年）

日本一へ全員がレベルアップ

松尾監督は来季への課題を「ピッチ内外で日本一にふさわしいチームにならないといけない。選手、スタッフ、監督である自分自身も含めて全員がレベルアップしていかないと」と、ステップアップの必要性を語った。日本一へは後3試合及ばなかったが、来季への期待は既に大きく膨らんでいる。今年のチームが2、3年生主体の若いチームだからだ。4年生として唯一試合に出場した太田賢吾（体育）は「4年生が頼りなかっただろうけど、3年生は支えてくれて、1、2年生はついて来てくれた。みんなに感謝したい。後輩たちはこの悔しさを生かして頑張って欲しい」と後輩に感謝を示し、来年に向けてエールを送った。太田のように周りに支えられていることを全員が感謝しながら戦えば、ピッチ外での日本一にふさわしいチームになれるだろう。後輩たちは、引退する先輩の戦う姿勢を学び、実践出来れば、来年はピッチ内外で本当の意味での日本一になれるだろう。

左サイドで相手を撹乱させた西田恵（体育２年）

東京まで応援に駆けつけた４年生

男子サッカー

後半猛チャージでつかんだ関西準V

第95回関西学生サッカーリーグ

4月15日～11月26日
ヤンマースタジアム長居他

残り2節の首位びわスポ大との対戦でインカレ出場を大きくたぐり寄せたエース末吉のゴールに喜ぶ選手

後期第９節 ベストゴールの大田賢生（体育３年）

巻き返しのきっかけはエースの復調

昨年、得失点差で惜しくも3位だった大体大は今年も前期を3位につけ、リーグの前半戦を好順位につけていた。後期リーグも勢いよくスタートしたかったが、初戦の近畿大戦を2―1で落とし、後期最初の3戦で2敗1分と苦しみ、順位も6位まで後退させ、インカレ出場すら危ぶまれていた。

怒濤の追い上げは後期初勝利から始まった。後期第4節で当時3位の関西大に勝利すると、関西大戦を含む後期リーグ残り8戦全て負けなし、7勝1分の破竹の勢いで準優勝に輝いた。個人賞でもDFの菊池流帆（体育3年）が優秀選手賞とユニバーシアード日本代表として世界1に貢献したことを評価され、関西学生サッカー特別賞の2部門を受賞した。続いてDFの田中駿汰（体育2年）とMFの末吉塁（体育3年）が優秀選手賞を受賞した。

大体大の後半の勢いをもたらしたのは「エースの塁（末吉）の調子が上がってきたのが大きい」と松尾元太監督は残り4戦全て上位対決の始まりである首位びわスポ大に勝利した試合後に振り返った。末吉は「得点は全てチームメイトのおかげ。みんなが自分のやり易いようにスペースをくれた。得点やアシストに繋がるプレーはみんなと動きがあってきた証拠」と自身の復調について語った。末吉の特徴である切れ味鋭いドリブルを周りが活かし、攻撃の連携をリーグ途中で修正できたのはインカレに向けて大きな収穫に違いない。

上位混戦を抜け出すきっかけとなった対戦時２位の阪南大戦で活躍した林大地（体育２年）

優秀選手賞を受賞し、大体大の後半からの巻き返しのキーマンとなったエース末吉塁（体育3年）

男子硬式テニス

安藤!! 大金星!!

大学王座13連覇中の早大選手破る

インドアインカレ予選の男子シングルス初戦、男子硬式テニス部の安藤新（体育3年）が大学王座13連覇の早大生を相手に、タイブレークまでもつれ込む接戦の末競り勝ち、金星をもぎとった。

平成29年度全日本学生室内テニス選手権大会

11月27日・28日／江坂テニスセンター

インドアインカレは、夏のインカレ、春、秋と各地域で行われる大会で年間上位の結果を残し続けた32人と、本戦から出場するシード選手を合わせた44人だけで行われる、学生テニストップレベルの大会。4年生がいない大会だが、インカレよりも出場選手が絞られており、出場することすら困難な大会である。関西学生連盟から出場した選手は8人しかおらず（地方推薦枠除く）、安藤はその中の1人だ。

安藤は出場するのにハードルが高いインドアインカレに2年連続出場している。更に今年は1回戦で、名うての早大の選手に勝った。予想を覆す大金星で会場を驚かせた。

安藤は以前から全国レベルの選手だったわけではない。高校時代はインターハイに出場できるかできないかの選手だった。一方早大の選手はインターハイで、ベスト16の実績があり、高校、大学でも格上だ。「大学3年間で戦えるレベル、勝てるレベルまで来ている」と宮地弘太郎監督が言うように、安藤は大学でメキメキ頭角を表してきている。

続く2回戦では惜敗したが、まったく歯が立たずに負けたわけではなく、善戦の末の敗戦だった。

安藤は3年生だが、全国でも戦える選手に成長した。全国で入賞できるレベルまであと一歩だ。実力ある後輩たちが入ってきており、ますます安藤の成長を促す要因が増えてきている。来年こそは1部復帰に期待のかかる大体大。安藤が4年生としてチームを引っ張る。

大体大で成長する安藤

日本一！ 東西体育大対決に勝利！

アルティメット

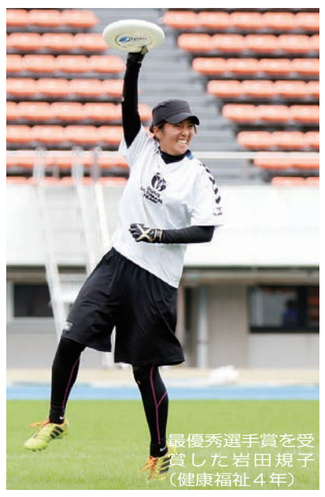
日本一の笑顔と涙

第28回全日本大学アルティメット選手権大会

9月30日 駒沢オリンピック公園陸上競技場

両校の意地とプライドをかけた、絶対に負けたくない「体大対決」は学生日本一を決める最高の舞台で行われた。インカレ初日の初戦、日体大戦では流れがつかめず、6−9で悔しい敗戦を喫した大体大だが、決勝戦は違った。序盤から試合を支配した大体大が、13−9で日体大を降し、5年ぶり3回目の優勝を果たした。個人賞は岩田規子（健康福祉4年）が最優秀選手賞を受賞した。

大体大の試合内容は文句のつけようがなかった。接戦が予想されていた試合だが、序盤から大体大ペース。先制点を取った大体大は立て続けに得点を重ね、前半を7−3で折り返した。後半も先制した大体大だが、日体大も負けじと連続得点で粘りを見せ、激しい展開になった。日体大の粘りにも大体大は屈しなかった。1点を着実に積み重ね、追いつかれても焦らずプレーし、栄光を勝ち取った。


最優秀選手賞を受賞した岩田規子（健康福祉4年）

大体大のチームコンセプトは「全員アルティ、楽しメット」である。伊藤真衣子主将（体育4年）は「一人一人が思い切ったプレーや、選手同士が信じ合ってプレーできた結果、ミスが少なくなり、優勝できたと思う」と大舞台で最高のパフォーマンスを発揮し、コンセプト通りの試合ができたことに誇らしげだった。

伊藤は「この試合だけを目標に1年間突っ走ってきた」と言うように優勝の瞬間の選手たちの表情には、日本一の笑顔と歓喜の涙が入り混じっていた。1年間苦楽を共に過ごしたチームで最高の結果を出した選手の涙には青春にかけた熱い気持ちがあふれていた。

特に4年生は勝っても負けても「引退」の二文字を避けることができない。最後の試合を勝利で飾ったのだ。うれし涙が出ないはずがない。後輩たちにとっては先輩とプレーする最後の試合である。先輩から、時には厳しく指導を受ける日もあっただろう。それでも先輩を信頼し、最後まで付いてきた後輩たちにも笑顔と涙が見られた。アルティメット部の全部員でつかんだ日本一は、大体大アルティメット部の新たな歴史の1ページに刻まれた。

全員アルティ★楽しメット

優勝の瞬間

リベンジは来季へ！

平成29年度関西大学対抗テニスリーグ戦1部2部入れ替え戦

9月30日／駒沢オリンピック公園陸上競技場

大体大は3年連続2部準優勝を果たした。3度目の正直をかけ、1部6位の神戸学院大学との入れ替え戦に臨んだが、ダブルス0−3、シングルス0−2の0−5で、またしても1部の壁を越えることができなかった。

1部復帰への差は小さな差

入れ替え戦でのスコアだけを見れば大敗に思えるが、接戦で試合を落としている選手がほとんどである。試合は打ち切りになったが、古川元樹（体育1年）は第1セットを取っており、有利な試合運びで勝利を匂わせる試合内容だった。大体大は勝ち星が期待できる安藤の試合も打ち切りになっていたことも踏まえると、スコアほどの差が無いのが正直なところだろう。

1年生ながら団体メンバーに入った小林泰晴（体育1年）

団体での総合の勝敗が付き、試合は打ち切りとなったが、1年生ながら相手にリードしていた古川元樹（体育1年）

安藤とともにチームを引っ張った徳光翔馬（体育3年）

着実に近づく1部復帰

大体大は団体戦こそ大きな成果が出ていないが、個人ではインカレ出場選手を輩出するなど好成績を収めている。インカレ出場を始め、個人で結果を残し続けている安藤新（体育3年）に関しては、まだ3年生である。2017年に入ってきた新入生も個人のトーナメントなどで結果を出している。団体メンバーのほとんどがまだ来年も戦える選手で、個人個人の結果は悪くないのが現状である。宮地弘太郎監督も「個人で結果が出ている選手も力をつけてきているし、団体は来年こそ勝負できる」と悲願の1部復帰に期待を寄せていた。宮地監督は「来年、また良い選手も入ってくる」と2018年に入る新入生にも期待していた。新入生の加入で大体大の1部復帰は目の前となるだろう。

数年で急成長！ 関西2部優勝！

バドミントン

平成29年度関西学生バドミントン秋季リーグ戦

9月11日〜30日／立命館大学OIC体育館他

2年前までは関西3部に所属していたバドミントン部男子だが、昨年の春に昇格を果たして以降、2部で戦い続けてきた。今春も下位ではあるが、着実に2部で戦えるチームとなってきていた。次なるステージである1部昇格へ挑んだ秋リーグで見事2部優勝を果たした。甲南大との入れ替え戦は3−1と惜しくも敗れたが、1ゲームを奪う健闘を見せた。

西日本選手権でも男女共団体戦ベスト16入りを果たし、着実と力をつけてきている。女子も関西2部で3位と健闘しており、男女アベックでの昇格も、夢ではないだろう。来季は1部昇格へのプレシャーがある中で「男女アベック昇格」という最高のドラマを見せてくれるだろう。

男子剣道

上位進出ならず

第65回全日本学生剣道優勝大会

10月29日／日本武道館

男子学生剣道団体日本一を決める大会に、昨年の覇者大体大は、関西王者として出場した。1回戦は北海道科学大に4－0と快勝して好調な滑り出しだったが、2回戦で関東の強豪、慶応大に1－4で敗れ、ベスト32でインカレの幕を下ろした。

今年の大体大は、昨年の優勝メンバーの主力だった4年生が卒業し、一からチームづくりを始めた。一から始まったチームだが、夏の西日本選手権は3位、秋の関西選手権は優勝と、出だしから好調さを維持し、好成績を残している状態でインカレに挑んだ。しかし目標である日本一には届かなかった。

石田崇主将（体育4年）は「昨年優勝して、ここ（インカレ）にかける思いはすごく強かった」と先輩達が残した「日本一」を背負い、大会にかけていたことを振り返った。周りからは2連覇の期待をかけられ、1年間戦い続けてきた主将としての重圧は計り知れないだろう。「残念な結果に終わってしまったけど、いろいろな方に支えてもらってここまでこられたので、悔いはないです」と石田は学生剣士の最後を感謝の気持ちで締めくくった。

インカレ負けなしの吉里幸起（体育４年）面の一本の瞬間

２回戦唯一の白星をあげた榎の面一本の瞬間

団体で関西2連覇！

関西第1代表のプライド

第65回関西学生剣道優勝大会

大体大は関西学生優勝大会に昨年の王者として臨んだ。初戦から圧倒的強さで勝ち上がり、トーナメントの山場である準決勝、関学戦を迎えた。試合は想定していた通り、引き分けが重なる展開。なんとか勝ち星の数3－2、本数9－7の大接戦を制し、決勝進出を決める。大接戦を物にした大体大は集中力が高まり、決勝の近畿大戦を圧勝し、見事2連覇を成し遂げた。

関西学生優勝大会は全日本学生優勝大会の予選大会でもある。強豪とされる大体大は予選大会だけに、まずはインカレ出場権を手にするベスト8まで勝ち上がることは絶対的だ。絶対勝利が必要だが、剣道において、というよりも勝負事に絶対はない。昨年の覇者といえども初戦敗退の可能性もある。プレッシャーが重くのしかかる中、大体大は関西第1代表の座を獲得した。大体大男子剣道部のプライドが勝利への執念を生み、関西第1代表でいくことしか許さなかったのだ。次は関西第1代表としてのプライドを背に全国2連覇を懸けてインカレを戦う。

女子剣道

堂々の関西3位入賞！

第41回関西女子学生剣道優勝大会

9月10日／大阪市立中央体育館

大体大は関西学生優勝大会で男女アベック2連覇の期待が高まる中、大会を迎えた。昨年の女王として臨んだ大体大は、初戦の神戸親和女子大に圧勝する好スタートを切った。続く2回戦から苦しい試合展開を強いられたが、接戦の試合を勝ちきり、準決勝まで進出した。

迎えた大教大との準決勝も、お互い粘りの剣道で相手に1本を与えない引き分けの試合が続いた。大体大は最後まで攻め続けたが、わずか1本の差で大教大に苦杯を喫した。準決勝敗退となったが、関西3位入賞の成績を収め、インカレの出場権を手にした。

インカレ団体

インカレベスト8

第36回全日本女子学生優勝大会

1月12日／愛知春日井市総合体育館

大体大の日本一に向けての大事な初戦は、高知大が相手だった。初戦から接戦を強いられた大体大だが、トーナメントを順当に勝ち上がり、3回戦でシード校の関東学院大を破り波に乗った。勢いそのままに準々決勝で西日本王者、この大会準優勝した鹿屋体育大に接戦を演じたが、惜しくもベスト8で退いた。

主将の有賀麻依（体育4年）

角野、2年連続全日本個人3位入賞

日本拳法

10月22日／名古屋市天白スポーツセンター

第33回全日本学生拳法個人選手権大会

学生個人チャンピオンを決める大会に大体大から男子4人、女子2人が出場した。今大会は昨年ルーキーながら3位入賞を果たした角野晃平（体育2年）に期待がかかった。角野は実力通り勝ち上がり、2年連続で3位に輝いた。

少数精鋭で戦う

大体大は昨年、団体でも結果を出している。全国大学選抜選手権大会でベスト4に入っており、他校からみれば、団体戦も強い強豪校だ。全国で優勝を争う強豪の大体大だが、男子11人、女子2人の合計13人と、強豪校では珍しい小規模のクラブである。少人数で日々の練習を集中的にやることで、大人数で練習をするチームより多くの成果を得ていることが結果に現れている。今後も少数精鋭で戦う大体大日本拳法部に注目したい。

男子柔道

Vアンドレス カナダで2冠達成！

2017年度カナダ国際ジュニア柔道選手権大会、同選手権大会、同選手権大会

5月27～28日／カナダ、カルガリー州カルガリー大学オリンピックスタジアム

カナダと日本のハーフである本学柔道部のアンドレス・ジョー・ケーシー（体育1年）が生誕地、カナダで国際大会と国際ジュニア大会に100㌔超級で出場、海外の選手の体格に圧倒され、自分の柔道ができず、黒星スタートとなった。

2戦目以降は村元辰寛監督の的確なアドバイスのお陰もあり、相手の攻撃をさばくことで、相手の懐に入り、技を掛けて勝利をつかんだ。アンドレスは大会期間で海外の選手との戦い方を身につけ、見事金メダル2個を獲得した。

目標は東京五輪

アンドレスは今回のカナダジュニアを優勝したことで世界ジュニア選手権への出場権を獲得した。世界ジュニア選手権に向けて「今大会で学んだ体格の大きな相手との戦い方を磨き、自分の体もさらに大きくして、世界ジュニアで優勝したい」と意気盛んだ。また「この世界ジュニアをきっかけに大阪体育大学柔道部の部員としてカナダ代表で東京オリンピックに出場し、優勝したい」と世界を舞台に戦う大きな目標を語った。まだまだ荒削りな原石だが、世界を舞台にトップ争いができるまで磨きをかける。

もう一つの故郷カナダで、男子柔道部に所属する、カナダと日本のハーフであるアンドレス・ジョー・ケーシー（体育1年）が国際大会と国際ジュニア大会に出場した。

２冠を達成したアンドレス（体育１年）

女子柔道

Vルーキー東 初出場で関西女王に！

関西学生女子柔道体重別選手権大会

9月3日／天理大学杣ノ内第一体育館

昨年国際大会でも活躍し、インカレなどの数々の大会で好成績を収めている、エースの山本沙羅（現ミキハウス）が抜け、戦力ダウンが不安視されていた柔道部女子に救世主が現れた。

1年生の東加珠（体育）だ。東は関西学生女子柔道体重別選手権大会に78㌔で初出場すると、並みいる強豪を圧倒し、初優勝を果たした。

東は続く、全日本学生柔道体重別選手権大会でもベスト8に入る活躍を見せ、女子柔道部の新たなエース候補に躍り出た。1年生の東には大きな期待は重荷になるかもしれないが、柔道部女子を代表する選手となり、全国の頂点を極められる素質は十分にある。

【各種競技記録】

（順不同）

アルティメット部
◆第28回全日本大学アルティメット選手権大会 関西・中四国地区予選（8月30日～31日、J-GREEN堺）
【女子】初日
▽第1試合 大体大 11－3 四天王寺大
▽第2試合 大体大 11－0 関学大
2日目
▽第1試合 大体大 11－1 大阪大
▽第2試合 大体大 11－2 畿央大
▽第2試合 大体大 11－5 甲南大
▽第1試合 大体大 7－9 近畿大
▽第2試合 大体大 7－9 大阪大
▽第3試合 大体大 10－7 関西学院大学
◆第28回全日本大学アルティメット選手権大会 本戦（9月23～24日、富士川緑地公園）
【女子】初日
▽第1試合 大体大 11－5 愛知淑徳大
▽第2試合 大体大 5－7 同志社大
▽第3試合 大体大 5－9 中京大
2日目
▽第1試合 大体大 8－6 北海道大
▽第2試合 大体大 8－6 明治大
▽第3試合 大体大 6－9 日体大
【男子】初日
▽第1試合 大体大 11－5 国際基督教大
▽第2試合 大体大 5－7 同志社大
▽第3試合 大体大 5－9 京大
2日目
▽第1試合 大体大 8－6 北海道大
▽第2試合 大体大 8－6 明治大
▽第3試合 大体大 6－9 日体大
※順位⑩ 大体大 13－9 日体大
▽決勝戦 大体大 13－9 日体大

アメリカンフットボール部
◆2017年関西学生アメリカンフットボールリーグD-v2APOFLASH FIELD他）
▽第1節 大体大 6－35 大教大
▽第2節 大体大 0－38 神戸大
▽第3節 大体大 20－28 追門大
▽第4節 大体大 10－33 神院大
▽第5節 大体大 0－22 大産大
D-v2Aプロック⑥
D-v3に降格

トライアスロン
◆2017日本学生トライアスロン選手権大会観音寺大会（9月3日、香川県観音寺市）
【女子】
○44山田真希
【男子】
1344宮本恒平
DNS新堂弘貴
◆日本学生スプリントトライアスロン選手権（10月22日、群馬県 渡良瀬遊水地）
【女子選手権】
○20山田真希
【男子選手権】
○69増田大成
【男子オープン】
○20梶原楓也
149横田真路

チアリーディング部
◆第29回全日本学生チアリーディング選手権大会
▽D-V1SION・1 競技部門 予選 総合○29 予選敗退

フィールドホッケー部
◆関西学生ホッケー秋季リーグ3部（9月24日～11月3日、甲南大学他）
▽第1節
大体大 4－1 神外大
▽第2節
大体大 1－1 摂南大
▽第3節
大体大 1－2 名古屋大
▽第4節
大体大 3－1 大商大
▽第5節
大体大 12－1 名商大
3部③

ライフセービング部
◆第32回全日本学生ライフセービング選手権大会（9月23日～24日、御宿中央海岸）
【男子】
▽レスキューチューブレスキュー
⑥大野悟、藤森佑輝、中村仁貴、蔵楽建哉
▽オーシャンマンリレー
⑥福井佑都、児玉拓二、大西飛翔、橋谷俊平
▽ビーチリレー
⑧入江司、西脇渓希、柳下卓弥、橋谷俊平
▽1kmx3ビーチリレー
⑥鵜飼智生、大西飛翔、遠山優生
▽ビーチフラッグス
⑧柳下卓弥
▽ビーチスプリント
⑥橋谷俊平
◆第43回全日本ライフセービング選手権大会 本選会（10月7日～8日、片瀬西浜海岸）
【男子】
▽レスキューチューブレスキュー
⑥福井佑都、楠本瑞希、柳下卓弥、田中大規
チーム総合○37

ラクロス部
◆第28回関西学生ラクロスリーグ戦（8月12日～10月28日、鶴見緑地スタジアム他）
▽第1節 大体大 4－8 大教大
▽第2節 大体大 2－21 関学大
▽第3節 大体大 3－14 関西大
▽第4節 大体大 6－7 大阪大
▽第5節 大体大 7－9 立命大
▽第6節 大体大 0－13 同志社大
1部⑦
2部降格

レスリング部
◆第43回内閣総理大臣杯全日本大学レスリング選手権大会（11月11～12日、福井・おおい町総合運動公園体育館）
▽1回戦（福里光） 5－0 大体大（庄司工）
▽1回戦（前田昌義） 4－0 大体大（中尾悠人）
▽1回戦（増野駿） 3－1 大体大（木戸遥樹）
◆2017年全日本学生選手権（8月28～31日、東京・駒沢体育館）
（グレコローマンスタイル59㌔）
▽1回戦（山口純平） 8－0 大体大（庄司工）
（グレコローマンスタイル66㌔）
▽1回戦（神奈川大（小池波也登） 8－0 大体大（中尾悠人）
（グレコローマンスタイル80㌔）
▽1回戦（岩崎陣也） VA 大体大（木戸遥樹）
（グレコローマンスタイル98㌔）
▽1回戦（塩川貴太） 0－11 大体大

演技の部 日本一

なぎなた 強豪なぎなた部 復活

第56回全日本学生なぎなた選手権大会

8月6日／三重県津市芸濃総合文化センター

なぎなたの全日本インカレは演技の部、試合競技団体の部、試合競技個人の部3部構成で行われた。大体大は演技の部で福岡歩（体育2年）、仕入愛梨（同3年）ペアが準々決勝以外5－0の圧勝で日本一に輝いた。試合競技個人の部では主将の仕入が4強入りの好成績。団体は0－1で惜しくも2回戦敗退となった。

「演技はひたすら練習した」と優勝の要因を振り返ったのは仕入だ。仕入の足の裏は、床で擦れてできた大きなマメがあった。天川彰子監督は「授業の空き時間も自主練習に励んでいたので、それが実を結んだのではないかと思う」と選手の努力をたたえた。空いている時間のほとんどを、演技の自主練習に充てた仕入と福岡の結果は一目瞭然だ。準々決勝の4－1以外はすべて5－0での〝完封勝利〟で、他を寄せ付けない強さを見せた。

優勝の要因はもう一つある。ペアの関係性だ。福岡は「自分は後輩なので、仕入先輩に付いていくことだけを意識した」と先輩を信じて演技したと言い、仕入は「自分も福岡をしっかり信じて打ち込んでいった」と後輩に全幅の信頼を寄せていた。練習以外でも苦楽を共にした時間が日本一の信頼関係を築いた。

福岡は「今までのなぎなた部は上下関係が厳しくて、先輩と接する機会が練習以外なかったが、キャプテンは自分たちにも普段から優しく接してくれる。時には厳しく、時には優しい、付いていこうと思えるキャプテンです」と普段から仕入のことを褒っていることが伺えた。

仕入は日本一になったが、満足していなかった。団体戦が2回戦で惜敗したからだ。今年は新入生が入り、なぎなた部員だけで団体戦に出られる人数になっただけに、団体戦にかける思いは大きかった。仕入は「団体戦の結果はめちゃくちゃ悔しい」と唇を噛み締めた。「団体は下級生が多いチームなので経験が浅かったところもあったが、また来年は頑張っていきたい」と天川監督は来年度に期待を膨らましていた。4年生のいない3年生主将率いる若いなぎなた部、来年は3部すべてで日本一に挑む。

ダンス 特別賞受賞！

第30回全日本高校・大学ダンスフェスティバル（神戸）

8月7日～10日／神戸文化ホール

演技最後の一番大きな嘘を表現しているダンス

大体大らしさ全開が魅力

ここ数年、毎年のように様々な大会で数々の賞を受賞してきた創作ダンス部が、今年も全国大会で特別賞を受賞した。創作ダンス部が今大会で披露した「フェイクニュース」というテーマのダンスは、嘘を徐々に広めていき、小さい嘘が大きくなって広がっていくということを表現したダンスだ。「主題にふさわしい斬新な動きの意見に対して」今大会で最も優れていることが認められ、特別賞を受賞した。

主将の橋本彩香（体育4年）が「入学の決め手は大阪の笑いの要素を入れた創作ダンスに惹かれたから」というように、大体大の一番の魅力は笑いを入れた創作ダンス、大体大生そのものだ。

大体大は大会で一番認められたいテーマを決めて、大会に向けて練習する。創作ダンスは、主題・演技の構成・振り付け、全て学生自らの手で作り上げて行く。早ければ、4月の発表会で演技した作品を深めて行くが、今年は違った。橋本は「話し合いをした結果、作品として深めていくには難しいということで新しいテーマを作成するようにした」と賞を取れるような作品を追求する事にしたと話した。

橋本は追求された作品「フェイクニュース」での受賞に「先輩方が連続で賞を取ってきていて、プレッシャーのある中で取れたので、本当にうれしかった。テーマに対しての動きが認められた賞という部分もうれしい」と笑顔を見せた。

9月にも後輩たちが「アーティスティックムーブメントin富山」で最高峰の賞を受賞し、東京で演技したダンスも認められ、韓国で演技を披露することが決まっている。今後も創作ダンス部の活躍に注目だ。

フェイクニュースを表現した集合写真

秋季リーグ 惜しくも3位で閉幕

2017年度阪神大学野球連盟秋季リーグ

9月2日～10月17日　南港中央野球場

大体大投手の2枚看板の一人、勝田紘一郎（体育3年）

春季リーグは4位で終えた大体大。秋季リーグでは一つ順位を上げて3位で閉幕した。大体大は上位2チームに勝ち星を挙げることが出来なかったが、エース門前侑太（体育3年）と2枚看板である勝田紘一朗（同）が防御率3点台で投手10傑にランクインするなど好成績を収めた。

投手2枚看板と打線

春は打線が沈黙していたが、投手が粘ってロースコアで逃げ切る試合が多かった。春に比べ、秋より打たれてしまった投手が勝てたのは打線の得点力アップにあるだろう。秋季リーグでは打線も1試合平均2．8点をマークし、投手を助ける試合が多かった。勝田は「接戦でも打線を信じて自分のピッチングをするだけ」と語っており、秋は全幅の信頼を置いていた。投手2枚看板も来季は、いよいよ学生野球ラストイヤーを迎える。最後の年に、2人揃って神宮の舞台で投げられる姿が楽しみだ。

活躍が評価され、社会人野球ミキハウス入りが決定している堅田啓太郎（体育4年、外野手）

1年次からスタメンマスクを被り、今年は攻守に渡って活躍した出雲亮冴（体育2年）

春秋連覇！

近畿学生軟式野球連盟秋季リーグ

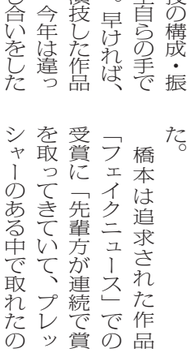
男子軟式野球

春秋連覇に雄たけびを上げる選手たち

10月11日／伊丹スポーツセンター

春秋連続優勝を狙う大体大は、大阪成蹊大に4－0の完封勝利で優勝を飾った。

大体大は初回から得点こそできなかったが、好機を築き、得点するスタンバイをしているようだった。攻撃の良い流れを盛り上げるかのように、大体大先発の田渕壮（体育2年）が初回から三振2個を奪う投球で三者凡退と最高の立ち上がりを見せる。田渕の好投で完全に勢いがついた大体大の2回表の攻撃で試合が動いた。



日本代表で主将の深瀬改（体育3年）

下級生の成長とチーム力

先頭の6番・米澤吉郎（教育2年）が右越え二塁打を放つと、相手の失策と暴投の間に1点を先制。1番・野口仁（同2年）の右越え適時三塁打で加点して3点目、試合のペースをつかんだ。田渕は「調子は良くなかったけど、ストレートで押していくピッチングができたのが良かった」と本調子ではなかったと言うものの、七回無失点、1安打、8奪三振の圧巻の投球を披露した。

大体大は五回にも好機を作って加点、完全に試合を支配して投打に渡り、実力で圧倒して春秋連続の優勝を果たした。

試合後、いつものミーティングが行われた。日本代表にも選出されている辻本勇真（体育3年）が「1年生も成長してきていることで、チーム全体が良くなっている」とインカレから秋季リーグの期間の1年生の成長をたたえた。深瀬改主将（同）も「全国大会で悔しい思いをしたので、練習に対する姿勢がどうなのかなど、3年生で話し合ってきた。リーグ戦は下級生含む、ベンチメンバーも声を出してみんなで同じ方向を向いて戦えた。これが大体大の強みで、めったに経験できないことを感じながら西日本大会に向けて頑張っていこう」と西日本大会に向けて士気を高めた。

最多勝、ベストナインの二つのタイトル獲得の田渕壮（体育2年）

関西リーグ 優勝！

関西女子硬式野球リーグ2017

女子硬式野球

優勝を喜ぶ選手たち

6月25日～11月11日　福知山市民野球場他

今年の関西女子硬式野球リーグ（以降は関西リーグ）は全17チームで行われた。関西リーグは高校、大学、クラブチームの全カテゴリーのアマチュアチームが出場し、アマチュア関西1位の女子硬式野球チームを決める大会である。関西リーグは各カテゴリーの大会日程を考慮し、長い期間をかけて戦うことから、調子の波を保つことが必要である。優勝するためには1年間通して戦う実力がいる難しい大会だ。大体大は、厳しい年間を通しての戦いで勝ち続け、AB各ブロックの上位4チームで行われる決勝トーナメントに進出した。決勝トーナメントでは、今シーズン大学カテゴリーの大会で結果を残せなかった悔しさを爆発させ、シーズン最後の大会を優勝という有終の美で飾った。大体大から投手の横井千晃（体育1年）が、5勝1分、防御率1・79の好成績を収め、最優秀選手賞に輝いた。

シーズン最後の大会を勝利で締めた！

最優秀賞受賞の横井千晃（体育1年）

ソフトボール部
【男子】
◆関西大学主催男子ソフトボール秋季リーグ戦（9月18日～10月7日、サザンスタジアム他）
▽第1節　大体大 2－1 大経大
▽第2節　大体大 8－6 神戸大
▽第3節　大体大 4－2 大阪市大
▽第4節　大体大 4－7 大阪府大
2部Bブロック②
【女子】
◆第49回関西学生女子ソフトボールリーグ戦（9月16日～11月3日、四天王寺大学）
▽第1節　大体大 16－0 兵教大
▽第2節　大体大 7－4 京産大
▽第3節　大体大 3－4 龍谷大
【二次部別】
▽第1節　大体大 2－3 大阪青山大
▽第2節　大体大 2－3 奈良学大
▽第3節　大体大 3－0 天理大
▽第4節　大体大 2－1 太成大
2部③

ソフトテニス部
【男子】
◆関西学生ソフトテニス秋季リーグ戦1部（9月23日～9月24日、マリンテニスパーク北村）
大体大 1－4 同志社
大体大 3－2 関西外大
大体大 2－3 関学大
大体大 2－3 立命大
大体大 3－2 関西大
最終順位④
【女子】
◆関西学生ソフトテニス秋季リーグ戦2部（9月23日～9月24日、マリンテニスパーク北村）
大体大 2－1 同女大
大体大 0－3 関西外大
大体大 1－2 桃学大
大体大 1－2 甲南女大
大体大 3－0 武庫女大
最終順位②
（鈴木友也）
（フリースタイル61キロ）
▽1回戦　帝塚山大（宇野秀俊）10－0 大体大（庄司工）
（フリースタイル86キロ）
▽1回戦　中京大（土屋正宗）4－0 大体大（木戸遥樹）
（フリースタイル97キロ）
▽1回戦　国士舘大（加藤耀汰）0－11 大体大（鈴木友也）
◆平成29年度西日本学生レスリング選手権大会（10月27～28日、大阪・堺市金岡公園体育館）
（フリースタイル57キロ）
▽1回戦　中京学院大（長沼政哉）4－0 大体大（庄司工）
（フリースタイル65キロ）
▽1回戦　関学大（高野翔大）0－5 大体大（中尾悠人）
（グレコローマンスタイル66キロ）
▽1回戦　日本文理大（田中稜大）3－1 大体大（中尾悠人）
（グレコローマンスタイル80キロ）
▽1回戦　帝塚山大（上高玄輝）1－3 大体大（木戸遥樹）
（グレコローマンスタイル59キロ）
▽1回戦　帝塚山大（藤本龍舞）4－0 大体大（庄司工）
（グレコローマンスタイル66キロ）
▽1回戦　九共大（三浦晃裕）5－0 大体大（中尾悠人）
（フリースタイル86キロ）
▽2回戦　九共大（山崎翔馬）5－0 大体大（木戸遥樹）
（グレコローマンスタイル59キロ）
▽2回戦　立命大（樋田智広）0－3 大体大（木戸遥樹）
（フリースタイル86キロ）
▽2回戦　九共大（大城有貴彌）4－0 大体大（木戸遥樹）

ラグビー

蘇ったヘラクレス軍団!!

4年ぶり歓喜、涙のAリーグ復帰

大体大は涙のAリーグ復帰を果たした。3年前、クラブ史上初のBリーグ降格から選手たちはリベンジに燃えていた。昨年の入れ替え戦は関大に後半同点とされてノーサイド。リーグ規定でAリーグ昇格を逃していた。

今年の入れ替え戦の相手は外国人留学生を擁する摂南大だ。試合は大体大が前半11分、CTB山下真之介（体育2年）のトライで先制したが、2トライ（1G）を許し、7―12で折返す苦しい展開。

後半5分、大体大は、伝統の強力FWがモールで押し込んでプロップ松岡啓太（同4年）がトライ、松坂泰作主将（同4年）がキックを決めて逆転。それでも食い下がる摂南大にまたもやリードを奪われるが、24分にモールで押し込んでフッカー柴田椋右（同4年）がトライ、試合終了間際の38分に大嶋凜太郎（体育3年）がダメ押しのトライ（G）を決めて、白熱したシーソーゲームを、28―17で制した。

もがき苦しんだ3年間

「本当に3年間長かった」と中谷誠監督は目を真っ赤にしながらプレッシャーと戦い続けた3年間を振り返った。大体大ラグビー部は、「ヘラクレス軍団」として一時その名を轟かせていた。周囲は勝つことが当たり前と思う中で、3年前の降格、昇格できない日々は部員だけではなく、ラグビー部にかかわるすべての人が苦しんだに違いない。松坂主将も「1年生の時にBリーグに降格して、Aリーグに昇格させることが、自分達の学年の責任としてずっと背負ってきた。最後にみんなで乗り越えられた」と涙ながらに3年間の思いの丈を打ち明けた。

責任感を感じていたのは、主将だけではなかった。「4年生がBリーグに降格させてしまった最後の世代ということを感じて、後輩たちにもう一度Aリーグでやらせてあげたいという思いが強かった。今日の試合は4年生も多く出場し、その気持ちが強く表れていた」と中谷監督が試合を振り返ったように、出場する4年生のプレー一つ一つに背負っているものの大きさを感じた。

4年生の思い、覚悟、応援で圧倒する応援団とOB、選手を鼓舞し、指示を出すスタッフ陣、すべてのステークホルダーが一丸となった80分を生み出し、摂南大に勝利する感動の瞬間は訪れた。

特別な1年間と新たな歴史の始まり

ラグビー部は、昨年の悪夢の入れ替え戦から1年間、短期計画として入れ替え戦を見据えて走りだした。長期的には全国で戦えるチームになることや、インカレ優勝などあるが、まずは今年、昇格を決めなければすべての計画が崩れるところだった。松坂も「特別な1年間だった」と振り返るように、大体大ラグビー部の今後を占う大事な1年だった。監督、主将共に「試合は厳しい展開になることは想定していた。それでもそこを勝ちきるために1年間やってきたことが出来た」と今季最後の試合でもある入れ替え戦で、持ち味を出来たことを振り返った。

4年生の思いは後輩たちに届いていた。来季はAリーグで暴れてやると言わんばかりの表情を見せていた後輩達は大事な1年を物にしたラグビー部は新たな歴史を創るべく再び走り出す。

関西大学ラグビーABリーグ入れ替え戦

12月10日／宝が池公園球技場

Bリーグ優勝！

関西大学ラグビーBリーグ最終節

11月26日／大体大ラグビー場

最終節は、優勝の条件がついた大一番が行われた。大体大が、ホームグラウンドを生かし、部員、OB、関係者の大声援を背に龍大を圧倒し、28―7で優勝を果たした。

「Bリーグとはいえ、優勝がかかった試合で、負けられない気持ちもあって、前半は動きが堅かった」と松坂泰作主将（体育4年）が振り返ったように、前半は大体大の勢いが見られなかった。試合前半は先制点、追加点と連続得点を取ったものの、失点もしている。得点でリードしているが、選手たちは納得のいかない表情を浮かべ14-7で前半を終えた。

圧倒した後半

声援を送る観客の表情にも不安が残るまま後半がスタートしたが、不安は一瞬で打ち消された。後半開始4分、松坂がトライ。開始早々、トライを奪われ、面くらった龍大は前半の勢いがなくなり、試合の主導権は大体大が握った。後半は前半と打って変わり、終始大体大が試合をコントロールした。33分には追加点を挙げて龍大にとどめを刺した。

昨年、大体大は関大との入れ替え戦で、前半10―0とリードしながら後半同点にされ、Aリーグに昇格できなかった悔しい思い出がある。松坂は過去のインタビューで「本当は去年昇格して、4年生になった時にAリーグで試合がしたかった。こんな悔しい思いは後輩にさせたくない」と力強く語っている。今回の試合後も「来年後輩達がAリーグでプレーできるように絶対に昇格する。それに尽きます」と最高の置き土産をすることが全てと言い切った。

得点に喜ぶ選手

9月9日～10月22日
近畿大学記念会館他

2017年度関西大学バレーボール連盟 男子1部リーグ

毎節接戦もリーグ上位進出ならず

バレーボール部男子は前半戦の春季リーグで8位と苦しんだが、西日本インカレではベスト8進出の躍進を見せた。秋季リーグでは上位進出、インカレ出場の期待を一心に予選リーグを戦った。上位進出

下級生チームの躍進に期待

ラインの3位と同勝利率の健闘を見せたが、セットカウントの得失点で惜しくも4位となり、下位リーグへ進むこととなった。勢いを失った大体大は、下位リーグで5位となり、2部降格の危機に立たされた。周囲が「もしかすると」と暗雲が立ち込める中、神戸学院大学との運命の入れ替え戦は行われた。不安は一蹴される。セットカウント3―1の圧勝を収め、プライドを保つ1部残留を決めた。

今季のバレーボール部男子は、試合に出場していたメンバーの大半が下級生だった。今シーズンは試合に出場する、数少ない4年生の主将広瀬優一（体育）が中心となり、下級生が奮闘した。

下級生は今シーズン大きく成長できる機会を得た。西日本インカレを下級生主体で勝ち上がった「自信」、リーグ戦を勝ちきれなかった「悔しい思い」の両方を経験している。下級生の来シーズンは楽しみだ。「悔しい思い」を持ち続け、得た「自信」を確かなものにするべく、来シーズンまでのオフ期間で成長し、春から関西トップで戦う姿に期待したい。

女子バレーボール

上位進出は来季に持ち越し

2017年度関西大学バレーボール連盟 女子1部リーグ

バレーボール部女子は大混戦の秋季リーグ予選ブロックで惜しくも1勝届かず、4位で下位リーグへと進んだ。下位リーグでは上位をキープし、前半戦の春季リーグの8位から一つ順位を落とした全体9位で秋季リーグを終えた。

今季のバレーボール部女子の主力メンバーは3年生だ。コートキャプテンも3年生の脇田美怜（体育3年）が務めている。脇田は龍谷大戦後のインタビューで「勝つためにはもっとチーム一丸となって気持ちとボールを繋いでいかないといけない」と振り返っていた。課題は一体感ということだ。

昨年は初の天皇杯・皇后杯に出場し、飛躍の1年を経験した。今の3年生以下も多くのメンバーが試合に出場していた。来季は3年生ですでに経験豊富なメンバーが4年生になる。来季は長江晃生監督も就任5年目となり、土台作りからチームを飛躍させる年になるだろう。長江監督が築き上げてきた土台と経験豊富なメンバーが、最強の一体感を生み出し、来季は黄金期と呼ばれる活躍を見せてくれるだろう。

得点に喜ぶ選手

9月9日～10月22日
近畿大学記念会館他

2017年度関西大学バレーボール連盟 女子1部リーグ

黄金期到来か

コートキャプテンでエースの脇田美怜（体育3年）

女子軟式野球

関西準V

関西地区大学女子軟式野球秋季リーグ

10月1日～12月3日
大芸大グラウンド

大体大は逆転優勝を目指して、園田女大、武庫川女大との対戦、園田に1―2で逆転負け、武庫女にはノーヒット・ノーランと手も足も出ず、0―5で完敗。3勝3敗と園田と並んだが、両校の直接対決による得失点差で、大体大が上回り、辛うじて2季連続の準優勝に食い込んだ。

4年生抜きの新チームは初戦20―6で大芸大に圧勝、園田戦も中村紗恵（教育2年）、杉野未来主将（同3年）のバッテリーが四回参考記録ながら、ノーヒット・ノーランを達成、打線のつながりもよく、15―0で好調な滑り出しだった。しかし試合が進むごとに〝若さ〟が逆回転、すっきりした準優勝とはいえなかった。

大体大　20―6　大芸大
大体大　15―0　園田女大
武庫川女大3―0大体大

全国、よもや…

第31回大学女子野球選手権大会

8月25日～30日／富山・魚津桃山球場他

2回戦から登場の大体大は第4シードの中京大と対戦、初回相手投手の立ちあがり制球不足に突けこんで、2四球に重盗を絡めるなどして先制機を築いたが、得点できなかったのが、後々まで響いた。

中京大に三回先制されると浮き足立ってしまい六回、七回と失策絡みで加点された。打線も立ち直った相手投手にほんろうされ、気力が空回りして長尾美空主将（体育4年）の左翼二塁打、松岡友梨（健福同）、篠原千波（体育同）の3安打に封じられてしまった。

4年生最後の大会ということが4年生にも下級生にも、大きな足かせになってしまったようだ。宿舎での最後のミーティングで、4年生は下級生に託し、下級生は4年生を敬い、負けたことよりも、人間形成という部活としては大切なことが共有できたのは、得難い財産になった。

▽2回戦　中京大　7―0　大体大

窓

◇◆平昌五輪開幕間近になりました。南北朝鮮が合同で出場します。一見明るい兆しのように思えますが、これほど政治がスポーツに介入したことはないでしょう。狡猾な北朝鮮に振り回され放しで、アスリートファーストなんてあったものではありません。専門家は北朝鮮の次の一手に不気味さを感じているようです。◇◆かつても合同で開閉会式に臨んだことはありますが、今回のようにアイスホッケーが合同チームになるということまではありませんでした。お互いの国旗をしっかり聞いてみたいとおもいます。

一旗として行進に臨むようです。韓国の文在寅大統領は「アイスホッケーは人気がないから合同チームだと関心を呼ぶ」とか「メダルがとれる種目ではないから」とか、さすがに謝罪したようですが、あいた口がふさがらないはこのことでしょう。◇◆IOC（国際オリンピック委員会）のバッハ会長ももろ手を挙げて賛成のようで、ナショナルエントリーが過ぎても、北朝鮮の参加を認めています。まるで威厳はなく、五輪を司るトップとして情けないとは思わないのでしょうか。こんな中、本学OBの2人の記者が特派員として取材にあたります。彼らの後日談をしっかり聞いてみたいとおもいます。

【相馬卓司】